様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２００５４

研究課題名（和文）創作法の分析に基づくダンスの美学的研究

研究課題名（英文）Reconstitution of the Dance Generating Process in Experimental Dance-Making

研究代表者
渡沼　玲史（WATANUMA, Reishi）

一橋大学・大学院法学研究科・助手

研究者番号：５０４１９７５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,800,000円、（間接経費）　540,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀の半ば以降に出現した実験的創作法を用いたダンスを資料収集と収集資料に基づいて創作法から生まれるダンスの生成過程を再構築し、そのプロセスを身体論的に分析した。その結果、振付家ウィリアム・フォーサイスがダンサーたちの即興を引き出しながら舞台作品化していく手法が明快なシステムとして記述できた。また、このシステムが身体というそれぞれ固有の限界を持つ媒体によって実現されるために様々な過剰と不足を含まざるを得ず、その結果単なる順列組み合わせとは異質なダンスが生まれていることを明らかにした。そして、今後の研究に活用できる多様な資料も収集できた。

研究成果の概要（英文）：Since the mid-20th century, choreographers have developed new experimental methods for "making movement": chance operations, indeterminacy, game structures, and various other forms of structured improvisation . I researched these methods in detail, discovering in particular enough information on the system used by William Forsythe and his dancers to reconstitute their actual movement-generation process. In the system, dancers improvise within a specified framework of rules. I developed a formalistic way of describing how Forsythe's system works during performance and how the dancers move within it. I use the term "simultaneous multi-series system" to describe Forsythe's approach, and clarify the workings of the dancer's body and mind within the system during performance. As the logical outcome of the system, the interaction between the framework of rules and the dancers' bodies inevitably exceeds the system.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：ウィリアム・フォーサイス　コンテンポラリー・ダンス　即興　ダンス　実験的創作法

１．研究開始当初の背景

ダンスは上演の場で消えてゆくものであり、それを補填する音楽における五線譜のような広く普及し誰もが手にできる舞踊譜も存在しない。そのためダンスの作品を研究対象とする場合には、そのダンスについて書かれたテクストを参照するという方法が取られてきた。現代のダンスを研究対象とする場合でもダンス作品そのものを対象とする学問的な方法論は存在せず、そのダンスを対象とした批評家の解釈であれば、資料として活用できるという倒錯した状況が存在する。こうした作品解釈においては観客がどのダンスを見るときも同じメカニズムによってダンスを見ている事が前提となっている。しかし、貫はダンスの創作法に対して現象学的＝身体論的な分析を行なった結果、創作法の違いによって観客がダンスを見るメカニズムが全く異なる事を明らかにした（貫成人「<不気味なもの>としての身体--現代アート,現代舞踊,反-本質主義の現象学」(『思想』第 916 号、2000 年 10 月、岩波書店))。

こうした成果にも関わらず、創作法の身体論的分析から作品評価を導きだす研究は、分析に適した実験的創作法においても殆ど存在しない。実験的創作法とは、振付家が動作の決定権を放棄し、チャンス・オペレーションを用いた偶然性や、ルールを定めた上でパフォーマー同士の関係性に任せる等、事前に結果＝運動が予測できないような創作法のことである。実験的創作法は、他の創作法とは異なりそこに働いている力学が比較的分かりやすく、かつ創作法に関する記録が残りやすいことから、創作法を対象とした研究に最適であると考えられた。しかし、これまで実験的創作法を対象とした創作法分析は殆ど行われてこなかった。

２．研究の目的

実験的創作法に対する詳細な分析を行い、全く異なる視点から振付家や作品を評価し直す。また、事例研究を積み重ねることによって実験的創作法に関する基礎的な研究にして創作法を用いたダンス研究の方法を確立することが本研究の最終的な目的である。

そのために断片的に存在する実験的創作法の記述を作品毎に集め整理し、実験的創作法の分類が可能となるような基準を作り、これまで明確に定義付けされていなかった様々な実験的創作法の定義を明確にし、諸作品の整理分類を行うことが具体的な目的となる。

特に 1960 年代のアメリカのジャドソン・ダンス・シアターの活動やそれに続くポスト・モダン・ダンスは実験的創作法の宝庫である。また、フォーサイス・カンパニーの芸術監督であるウィリアム・フォーサイスはフランクフルト・バレエ団を率いていた 1980 年代から実験的創作法を実践している振付家である。これらの実例を実験的創作法の分析を基に、作品分析を行いそこで機能する観客がダンスをみるメカニズムを明らかにすることで作品の評価、振付家の評価を確立し、これまでの観客・批評家の解釈、振付家の意図が中心のダンス研究にかわる、創作法の分析という新しい研究手法を確立することを目指した。

３．研究の方法

研究の方法は、実験的創作法を行っている振付家の資料を国内外で収集した上で、収集された資料を分析するものである。具体的には、早稲田大学演劇博物館、ニューヨーク・パブリック・ライブラリー、ニューヨーク大学の Fales Library では、主にジャドソン・ダンス・シアターとその周辺の活動に関する資料を収集した。The British Library、ロンドン・ラバンセンター、ケルン・タンツアルヒーフでは、振付家ウィリアム・フォーサイスに関する資料を収集した。

そして、各々の実験的創作法において収集した資料に基づいて、動きの生成過程を再構成した。この過程で、十分に再構成できないものは考察の対象外とした。再構成できたものに関しては、先行研究と研究代表者の以前の業績をもとにして、身体論的分析を行った。特に以下の点に着目して分析を行った。ここでいう身体論とは、精神と身体の対立を前提として身体を精神に従うものとして扱うのではなく、身体に精神に収まらない独自の価値を認める立場であり、そこから身体と精神の関係の分析を行う立場のことである。

具体的には以下に挙げることを問いながら対象の分析を進める。運動を生み出す際に主体となるのは精神か身体かあるいは別の要素か？　身体と精神の関係はどのように規定されているか？　運動がどのようなプロセスをたどって生み出されるのか？ 生み出された運動を観客が知覚するプロセスはどのようなものか？　創作法に則ってダンスを行っている際にダンサーの精神／身体に何が起こっているのか？ 分析は、既存の枠組みに当てはめるのではなく、創作法の中の詳細な事実と身体論との照応から該当創作法固有の方法を構築した。

４．研究成果

平成 23 年度は当初の計画通り、アメリカでダンスの実験的創作法を実践したジャドソン・ダンス・シアター及びグランド・ユニオン、ポスト・モダン・ダンスの活動を早稲田大学演劇博物館、ニューヨーク大学 Fales Librery 及びニューヨーク・パブリック・ラ

イブラリーにおいて資料収集を行い、貴重な資料を閲覧・収集することができた。その資料群を分析した結果、本研究が目的とする実験的創作法の詳細な分析が可能となるような、創作法に関する十分な詳細な記述がほとんど存在しないことが判明した。このため予定通りに研究が進まない時のための計画通り、詳細な記録が存在する振付家ウィリアム・フォーサイスに研究対象を絞って研究をすすめることとした。平成 23 年度は実験的な創作法の詳細な記録が存在する近接分野である現代音楽との比較研究を進めた。現代音楽は特にジャドソン・ダンス・シアターに於けるジョン・ケージの影響に顕著に見られるように、多くの実験的な創作法を試みる振付家が直接・間接に影響を受けていることが明らかであり、比較に適した対象である。平成 23 年度はウィリアム・フォーサイスに於ける実験的な創作法と、現代音楽の一手法としてのセリー主義を比較し、研究を進めた。現代音楽におけるセリー主義とは、一連の音の組み合わせ（セリー）を作り、そのセリーに様々な数学的な操作を施す事によってヴァリエーションを作り、そのヴァリエーションを構成することによって作曲する手法のことである。セリーは順序を示す番号と音高の組で構成される項の連なりであると考えることができる。フォーサイスの手法をセリー主義の概念を用いて整理することができると考えた。その結果、フォーサイスに於ける実験的創作法が複数セリーのランダムアクセスによるダンスの自動生成という側面をもつことが明らかになった。

セリー主義においては、事前に作曲家が元となるセリーとそこから派生したヴァリエーションを通時的に構成することによって曲が出来上がる。しかし、フォーサイスのシステムでは、ダンサー一人一人が複数のセリーを記憶し、舞台空間上の情報をセリーのインデックスと結びつけ、そのインデックスに対応するタスクを行うことで即興的にダンスが生まれていく。こうして生じた運動、空間、ダンサーの形はまた、インデックスとして見ることが可能である。こうしてみるとこのシステムは一見セリーの順列組み合の自動生成システムとして見ることも可能であるように思われた。

しかし、同時にこの自動生成が身体というそれぞれ固有の限界を持つ媒体によって実現されるために様々な過剰と不足を含まざるを得ず、その結果単なる順列組み合わせとは異質なダンスが生まれていることを明らかにした。

平成 24 年度は平成 23 年度の調査結果に基づき、引き続きフォーサイスの実験的創作法に関する研究を進めた。平成 23 年度の研究では、フォーサイスの創作法のシステムとしての側面は説明が可能であったが、そのシステムのなかで実際に踊っているダンサーたちの主体が問題にされることはなかった。そこで平成 24 年度は、やはりシステムの記述としては大変な成果をもたらしながら、主体という問題系の処理において批判を受ける構造主義との比較において検証した。特にジル・ドゥルーズの構造主義理解と比較したが、まだまだ異同も多くそのことの意味を検証し、より整理した形で記述していく必要があることを確認した。

平成 25 年度は、平成 24 年度までの調査に基づき、ケルン・タンツアルヒーフとロンドン・ラバンセンターで資料調査を行った。ケルン・タンツアルヒーフではウィリアム・フォーサイスの≪インプロヴィゼーション・テクノロジー≫のオリジナル・ヴァージョンを確認し、CD-ROM 版との異同を調査することができた。またフランクフルト・バレエ団のダンサーであったニック・ハフナーが寄贈した資料を調査し、フランクフルト・バレエ団が《失われた委曲》を制作した際にドラマトゥルクであったハイディ・ギルピンが制作した未刊行の資料集の中身を確認することができた。またロンドン・ラバンセンターでは、ウィリアム・フォーサイスが《失われた委曲》を制作した際に用いたさまざまな資料を調査することができた。確認できた資料は、ダンサーたちが書き込みを加えたフォーサイスによるスケッチや制作当時の記録映像、ロズリン・ズルカスによるフォーサイスのインタビューのテープ起こし、書き込みが入ったルドルフ・フォン・ラバンの"Choreutics"のコピーなど多岐にわたった。

以上の資料群から（1）≪インプロヴィゼーション・テクノロジーズ≫の生成過程（2）複数セリーのランダムアクセスによるダンスの自動生成という創作法に至るまでの生成過程（3）≪失われた委曲≫の制作過程を解明できると考える。特にこれまで主として実験的創作法の形式的な側面に注目して研究をすすめてきたが、生成過程を知ることによって実験的創作法を貫く動機や原理をより詳細に解明できるようになると考える。しかし、収集できた資料が多く未だ詳細な分析は終了していないが、今後研究を進めるにあたって貴重な資料が収集できた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１　件）

① 渡沼 玲史、ウィリアム・フォーサイスの即興システム、演劇映像学 ： 演劇博物館グローバル COE 紀要 2011 第 1 集、pp. 299-310、早稲田大学演劇博物館、2012 年、査読あり

〔学会発表〕（計　１　件）

① 渡沼 玲史、ウィリアム・フォーサイスの即興におけるダンスの主体、舞踊学会第 64 回大会、2012 年 12 月 2 日、東京大学、

東京都

６．研究組織

(1)研究代表者

渡沼　玲史（WATANUMA, Reishi）
一橋大学・大学院法学研究科・助手
研究者番号：50419751